

2024年3月11日発行

Shelter 002101-002102

牛 尾 卓 巳

相模女子大学紀要 VOL.87 (2023年度)

Shelter 002101-002102

牛 尾 卓 巳

Shelter 002101-002102

Takumi USHIO

Abstract : In May 2023, I presented six works at the Fiber Art by Fifteen exhibition held at the Museum of Kyoto. In this paper, I will focus on two of the main works, “Shelter 002101” and “Shelter 002102,” and explain their concepts, materials, techniques, and more.

Key Words : weaving, textile, design, wool, fiber art

1 はじめに

私は2023年5月に京都文化博物館で開催された「ファイバーアートの15人」展に参加し、6点の作品を発表した。本展は繊維、糸を材料とした織物、フェルト等による造形表現に焦点を当て企画された展覧展である（図1-1、1-2、1-3）。2021年に開催された第2回展に続き2回目の参加となる。

本稿では6点の出品作品のうちメインとなる2点を中心にコンセプト、形態、色彩、素材、技法、構造といった作品を構成する要素をひとつずつ記述していく。

2 展覧会概要

展覧会名：ファイバーアートの15人
会期：2023年5月16日（火）～5月28日（日）
会場：京都文化博物館5階ギャラリー
出品者：阿久津光子、出居麻美、伊藤藍、牛尾卓巳、
大手裕子、岡本直枝、小野山和代、草間喆雄、久保
田繁雄、佐久間美智子、椿操、中野恵美子、野田睦
美、林塔子、前田千絵子（50音順、敬称略）

講演会

日時：2023年5月20日（土）

会場：京都文化博物館別館2階

登壇者：久保田繁雄「インターナショナル・タピス

トリービエンナーレ・ローザンヌについて」
 三谷渉氏（田辺市美術館学芸員）「田辺市美術館での
 現代の織シリーズについて」

本展は久保田繁雄・大阪成蹊大学名誉教授を中心に
 に企画された展覧会で、2018年、2021年に続き3回
 目の開催となる¹。展覧会の主旨は以下の通りであ
 る。

1970年代に遷移を素材とした新しい芸術表現が全
 世界的に生まれた。特にスイスのローザンヌで
 1995年まで開催されていた国際タペストリービ
 エンナーレに於いてファイバーアート、ファイバ
 ークラフトという分野も確立され今日に至っている。
 しかし、今日では日本の美術館ではごく一部のと
 ころで企画展が開催されるだけである。そこで
 2018年に京都文化博物館で独自の視点で有志が集
 まり「7人のファイバーアート展」を開催。さら
 に2021年8月にメンバーに中堅作家も加え、関東
 関西の作家による拡がりのある展覧会を同会場に
 て開催した。さらにより一層充実した展覧会を再
 度開きたいと考え、2023年5月に新たにメンバ
 ーを入れ替えて、ファイバーアート展を開催した。

3 出品作品

私は2005年から「Shelter」というシリーズで糸
 や繊維素材を使用した織物による作品を国内外で発
 表している。本展では以下の6点を発表した。

- Shelter 002101（図2）
- Shelter 002102（図3）
- Shelter 002301-1（図4）
- Shelter 002301-2（図5）
- Shelter 002301-3（図6）
- Shelter 002301-4（図7）



図1-1 展覧会のフライヤー



図1-2 展示会場となった京都文化博物館



図1-3 会場風景



図 2
Shelter 002101
サイズ：H160×W190
×D35 (cm)
素材：綿・ウール



図 3
Shelter 002102
サイズ：H160×W190
×D35 (cm)
素材：綿・ウール



図 4
Shelter 002301-1
サイズ：H120×W40×D18 (cm)
素材：綿・ウール



図 5
Shelter 002301-2
サイズ：H93×W70×D20 (cm)
素材：綿・ウール



図 6
Shelter 002301-3
サイズ：H72×W120×D17 (cm)
素材：綿・ウール



図 7
Shelter 002301-4
サイズ：H130×W54×D16 (cm)
素材：綿・ウール

冒頭に記したとおり、今回はメインの作品である「Shelter 002101」と「Shelter 002102」を中心に解説していく。

4 作品コンセプト

生物は生存のために様々な方法で自身の身を守っている。あるものは甲羅や鱗など硬く覆われた外皮によって外敵の攻撃を防ぐ。また鋭く尖った棘により接触を拒むもの、大きく突出した角により外敵からの攻撃に対抗するもの。身を隠すために環境に溶け込み擬態するもの、逆に敢えて目立つ色彩により毒を持っていることをアピールし捕食者を威嚇するものもある。これは永い時間の中で、環境に順応し

た形態や方法を持った者が生き存えた結果であり、未だ進化の過程ではあるが、現段階では最適なかたちと言える。この身を守るかたちこそが、その個の本質を表している。

私たち人間は道具を作る・使うという他の生物にない方法で環境に順応してきた珍しい種である。現在も様々な道具により身を守っているが、私はその中でも衣服に着目した。現在の私たちは、衣服というかたちで布を纏うことにより気候の変化や、外傷、紫外線などから自身の身を守っている。物理的な意味だけでなく、社会での役割を示す目的や、自分を象徴するもの、表現するものとしても機能している。私たちにとって布は自身を守る一番身近なシェルターであると言える²。



図8 Shelter 002101 (細部)



図9 Shelter 002102 (細部)

5 形態

作品コンセプトにあるように、私たちが普段身につける衣服を、身を守るシェルターと捉え彫刻的な立体作品として造形した。衣服とは胴、腕、脚を覆い包み着用するもので様々な種類、形状がある。その衣服の要素を誇張や省略、あるいは別のものに置き換え全体のフォルムを練っていく。不要な部分は捨て去り、削ぎ落として極力シンプルな形状に落ち着かせる。

今回は2点がお互いに関係し合っただけの作品となるようにした。この2点は上下反転すると同じシルエットになる。

前回発表した「Shelter 001801」と同様、どこか日本の伝統を感じさせるよう、大きく円弧を描いた扇型を基本の形とした³。また、日本人には馴染み深いイチヨウの葉からも着想を得ている。この外形に扇の要から放射状に広がる動きを表す縫い絞りのようなテクスチャを与えた。

これらのアイデアに基づいて2作品の形態は決定した。

6 色彩

前述したとおり、今回は2点でひとつの作品として制作した。2点を同じ空間、壁面に設置した際に寒い冬の時期には暖かみを、暑い夏の時期には涼しさを感じられるよう、暖色と寒色をそれぞれの作品に使用した。

「Shelter 002101」には暖色のオレンジ～ブラウンを基調にイエローグリーン～グリーンを用いた。



図10 色見本 上: Shelter 002101
下: Shelter 002102

「Shelter 002102」では寒色のターコイズブルーやコバルトブルーを基調に、一方の作品と響き合い調和がとれるようブラウン～イエローオーカーの色味を用いた。(図10)

表面に使用する綿糸はほぼ全て自ら染料を調合し染色している。基本的には直接染料を用いるが、発色の良さを求める色に関しては反応染料を用いている。糸は総に分けて染色をする。必要に応じて単色に染める場合もあれば、中間色や混色の効果を狙う場合は総を2色の段染めに染め分ける。

7 素材

使用している素材は綿糸と羊毛100%のウール糸である。私は羊毛の性質を利用したテキスタイル表現を研究テーマとしており、これまでほとんどの作品に羊毛を素材として使用している。制作する作品により、原毛のまま使用することもあれば、糸の状態で使用することもある。

羊毛繊維には水分を含んだ状態で圧力、振動を加えると、お互いの繊維が絡み合いフェルト化する性質がある。この働きを縮絨という。今回使用した綿糸とウール糸のように、羊毛繊維と異素材を組み合わせると、それぞれの素材の収縮率の差により様々なユニークな表情が現れる。

8 技法

この作品では主に4つの技法を用いている。縮絨、二重織、綴織、円弧織である。それぞれどのような技法であり、どのように作品の表現につながっているかをひとつずつ解説する。

1. 縮絨

縮絨を利用した技法にフェルト技法がある。フェルト技法には大きく分けて二通りの方法がある。

ひとつは羊毛(獣毛)からフェルトを作る方法として古くから行われてきた水を使う方法である。羊毛は水分を含んだ状態で圧力、振動を加えるとフェルト化する。その働きを利用してお湯と洗剤などを使用し羊毛からフェルトを作る。この方法はウェットフェルティングと呼ばれている。衣類や遊牧民の住居など様々な生活用品が展開されてきた。

もうひとつの方法は先端にいくつかの細かい刻みが入ったフェルティングニードルと呼ばれる特殊な針を使用し、羊毛を刺して繊維同士を絡ませフェル

ト化させていく方法で、ニードルフェルティングと呼ばれる。これは工業的にパンチングカーペットなどを製造するニードルパンチとして以前からあった技術だが、近年では一般にも普及し、手芸やクラフトなどモノづくりを楽しむ多くの人に親しまれている。

2. 二重織

二重織は表と裏の二重の生地を同時に織る織物の技術で、表と裏で異なる素材や織構造の生地を織ることができる。また、筒状の織物や倍幅の織物も作ることができる。私は表面に綿糸、裏面にウール糸を使用し、表裏を部分的に接結するよう設計している。織り上がった後に縮絨させると図のようなシワのテクスチャが表面に現れる。このシワは裏面のウール糸の入れ方と接結点の位置によってコントロールしている。(図11)



図11 二重織 (縮絨後)

3. 綴織

綴織はエジプトのコプト織やヨーロッパのゴブラン織りと同じ技法で、複数の色糸を緯糸として使用し、絵を描くように織られた織物である。本来、綴織は経糸が見えないくらい緯糸を打ち込み、緯糸のみの色で絵柄を見せる。私は経糸と緯糸の色の効果を見せたいため経糸と同じ程度の密度で製織している。また、緯糸はより自然な色の移り変わりを表現するため、2本の色糸を引き揃えて織り込んでいる。経糸と緯糸の色彩効果は点描画と同様に、彩度を損なうことなく混色することができる。(図12)

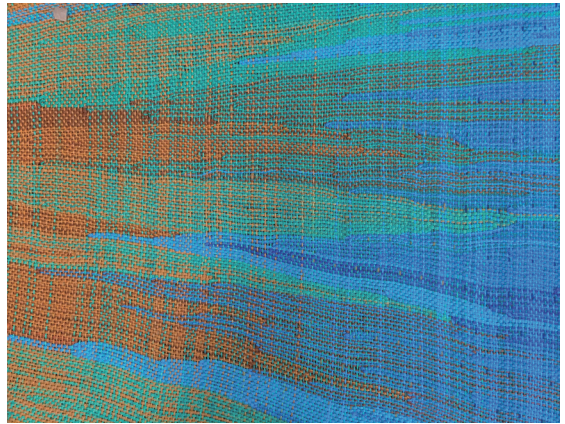


図12 綴織

4. 円弧織

織機で布を織る際、通常は経糸に対して直角に交わるように緯糸を入れて織る。経糸の端から端まで緯糸を渡して織られた布は四角形に織り上がる。ほとんどの布は目的に合わせて裁断、縫製され衣服やその他の製品に加工される。このため、四角形に製織してあれば布としての役割は果たす。

今回の私の作品では扇形の外形と放射状に広がる色糸の効果やヒダのテクスチャを造形するために織り上がりが円弧を描くように織った。これは独自に考案した経糸の張り方と製織方法である⁴。(図13)

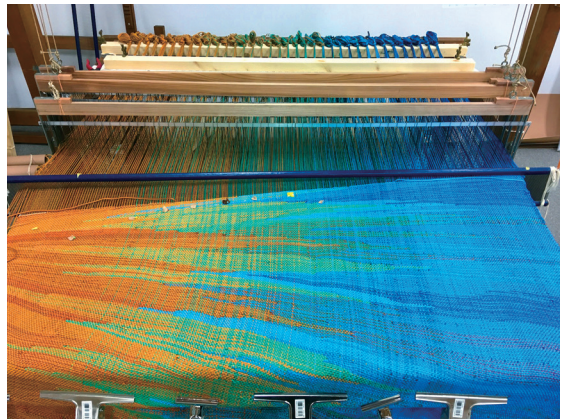


図13 円弧織

以上の4つの技法により唯一無二のテキスタイルを生み出している。

9 構造

今回は壁面に設置することを前提として設計した。壁面との接点は背面の1箇所であり、その部分で自重を支える構造である。

Shelterというタイトルの通り、身を守るものであることを形状で表すために、中に身体を感じさせる立体として造形している。

今回の作品で私が使用している綿糸やウール糸を使用し製織した布は柔らかく、それ自体で自立することや立体の形状を保つことは困難である。このような布を自立させる方法はステンレスワイヤーなどの金属製の糸で織る、または金属や木材を部分的に織り込むなどにより構造を保つ方法や、織り上がった後に布を糊や樹脂などで固めてしまう方法もある。しかし、前者では立体構造としては弱い、後者では布の風合いを損ねるなどの問題がある。これらの理由から私は布とは別に骨組みを設計し造形している。強度と軽さが必要なためアルミの板を加工して使用。布で覆った際の見え方も考慮しながら、立体として形が保てるよう設計した。(図14)

10 おわりに

Shelter 002301-1~4は緯糸として織り込む素材や、表と裏をつなぐ接結点の違いにより、どのような表情が生まれるかを探った習作である。経糸の動きが明確になるよう、等間隔の緯に経糸を張った。

Shelter 002301-1は二重織りの接結点をこれまでの経方向、緯方向以外に斜めに加える方法を試みたものである。これにより複雑に角度を入れ替えたヒダのテクスチャを表すことに成功した。(図15)

Shelter 002301-2・3は裏面に使用していたウール糸を表面に織り込んだもの。ウール糸で織った部分は裏面とともに縮絨し平面的になる。シワのテクスチャと差によって、より変化に富んだ表情となった。(図16)(図17)

Shelter 002301-4は縞模様の経糸が縮絨後にどのような視覚効果をもたらすか、色と表情の関係を探ったものである。(図18)

今後はこれらの習作をもとに、新たな作品制作に取り組みたいと考えている。

注

^{1~4} 牛尾卓巳「テキスタイルの新たな視点を求めて」相模女子大学紀要 vol.85、2022年1・4・5・7頁



図14 構造



図15 Shelter 002301-1 (細部)



図17 Shelter 002301-3 (細部)



図16 Shelter 002301-2 (細部)



図18 Shelter 002301-4 (細部)